

2 山上寺跡出土の中世遺物について

綿 貫 俊 一

後 藤 幹 彦

序

筆者の1人綿貫は、1988年と1989年の両年、佐伯市教育委員会主催の発掘調査にたずさわっていた。とくに1988年の発掘期間中、地元の藤田喜代一氏・佐伯市社会教育課の山田健一氏から母牟礼城跡周辺の歴史的遺産について多くの御教示を得た。その際、母牟礼城跡の東方に位置する山塊山嶺部に古い山嶽寺院跡が点在しており、そのうちの1つである山上寺（三乗寺）跡から古鏡・古貨幣が出土していた事実を知った。

「山上寺」について、1989年の古鏡・古貨幣の確認、1993年12月に後藤と伴に寺跡を踏査したことによってその存在を確認した。その結果、遠く平安時代後期（12世紀頃）にさかのぼる古い遺物が観察した他、寺跡と称される地点における地形上の造作痕が良好に観察された。

以下、山上寺をめぐる事柄を報告していくが、「山上寺」跡の踏査に同行された、広瀬キンさん・藤田喜代一さん、発見当時のことを教えて下さった広瀬武士さん、高野テルさん、遺物調査に便宜を計っていただいた山田健一さん（佐伯市社会教育課）に厚くお礼申し上げます。（綿 貫）

1 遺物発見と保管にいたるいきさつ

1940年（昭和15年）の春か秋、某祈禱師と伴に、協地区の高野フミ、高野カメ、高野イエ、高野ヌサ、高野ミツ、高野文作、高野正一、河野武士、広瀬キン等9名は、山上寺跡に残る「お地藏様（地藏浮彫型墓碑）」に参拝している。その際、旧境内地の一角で土中から、鏡7面、古銭約800枚が掘り集められた。その時のことを、当時22歳の広瀬キンさんは「何か器のようなものに入っていた気がする。」と証言している（1993年12月中旬の聴きとり調査の際の証言）。この証言は、遺物の良好な残存状況を見ると、うなづけるものがある。

その後、掘り集められた鏡や古銭は、屋号が「山上寺・三寺」（山頂部あった山上寺の坊があったことに由来する。）の高野イエさん方で保管されることになったようである。そして高野イエさんの子供である正行さん・サダ子さんに受けつがれ、孫の正勝さんへと受け継がれている。高野正勝さんは、1970～1973年頃、母のサダ子さんから「大切なものだから市に寄贈したら」と言われた事もあって佐伯市教育委員会に寄贈している。1974年に正勝さんは亡くなられたが、この間の事情は1940年当時山上寺跡のお地藏様に参拝され現在もお健在でいらっしゃる広瀬キンさん、屋号山上寺の高野家跡に隣接する場所に住んでいる高野テルさんの証言を得た。

なお、寄贈を受けた際の市教委側の記録でも、鏡と古銭が山上寺跡の出土品とされている。こうした経緯があって現在佐伯市教育委員会が保管している。（綿 貫）

2 「山上寺」跡の景観

(1) 地理上の景観

山上寺跡は母牟礼城の東北部の山塊尾根に建立されていた。母牟礼城と「山上寺」跡の平面の直線距離は1560mで、この間に門前川が南流する谷がある。この谷あいには、「根小屋集落」に由来すると考えられる平坦な造作地形が観察される他、中世に由来する神社や仏閣が存在していたことを示す地名・伝承が多い。こうした事柄とその地形上の景観が狭小な谷あいであることは福井県一乗谷に通じる。門前川沿いの狭小な谷あいは、北に向うほど更に狭小になる。門前川沿いの谷と同様な谷は、「山上寺」跡が立地する山塊と、より東方に位置する白坪山・

城山等の山塊にはさまれた間にある。こうした母牟礼山、山上寺山、臼坪山・城山は全体として見ると南北方向に延びており、中央構造線の1支脈に含まれるが、西から東へ東流する番匠川によって断たれ、形造られた沖積平野が南に望まれる景観である。

さて山上寺山のピークは232mであるが、「山上寺」跡が立地する地点は、南西方向に向って高度を減じながら延る尾根上の地点（標高162.3m）である。この地点から南西方向へ160mの尾根上には「二上寺」跡と称されるフラットもある。「山上寺」跡の地形の略は、北側には人の手が入っていない自然の尾根部分が残し、この南側が造作によってフラットにされた面が連続する（第39図）。（綿 貢）

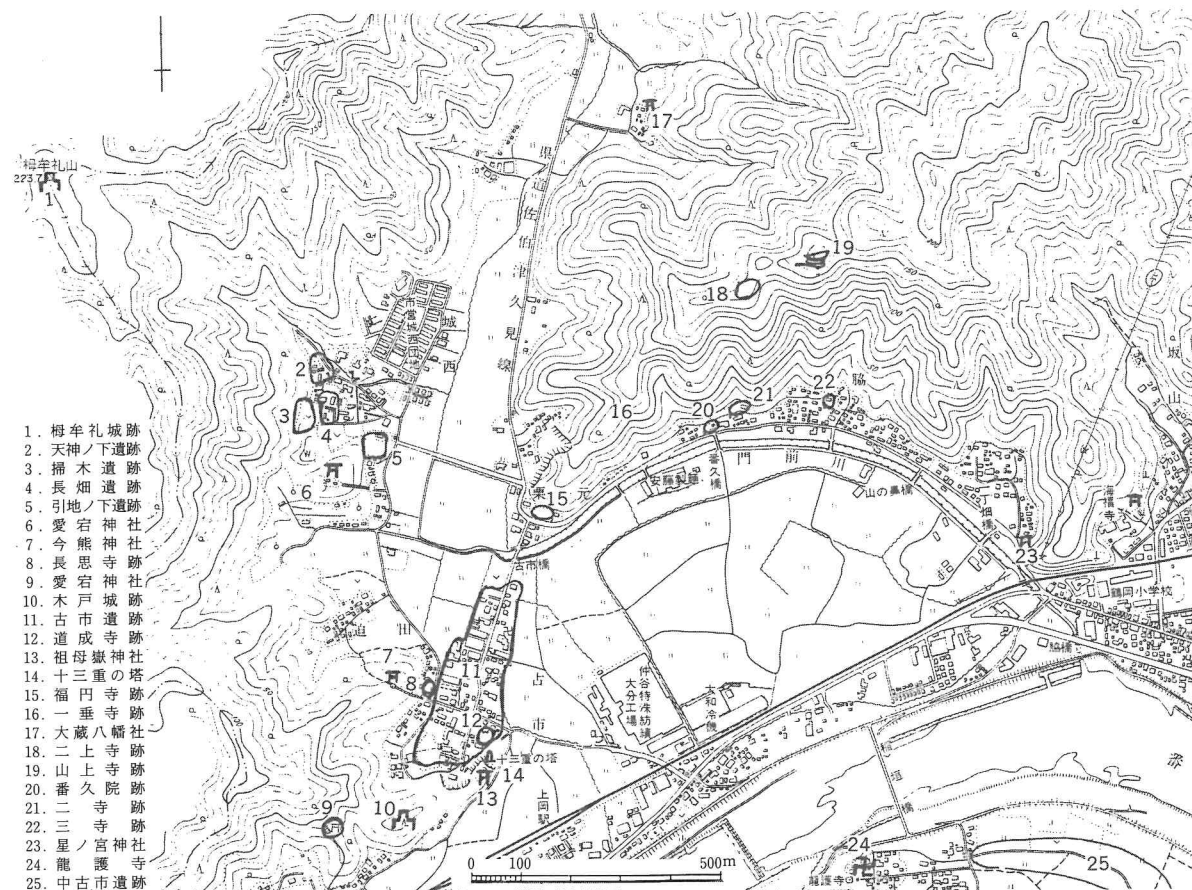
(2) 山上寺跡周辺の宗教景観

山上寺跡近在に関する近世以前の状況がどのようなものであったのかという事柄は、現在では全く謎にみつまっている。そうした中であって山上寺跡や母牟礼城跡などの近隣には多くの神社仏閣（跡）の存在が知られている。これらのうちの多くが平安時代や大神姓佐伯氏によって大永年間に建立されたことが、佐伯古社神明記や社伝に記されている。

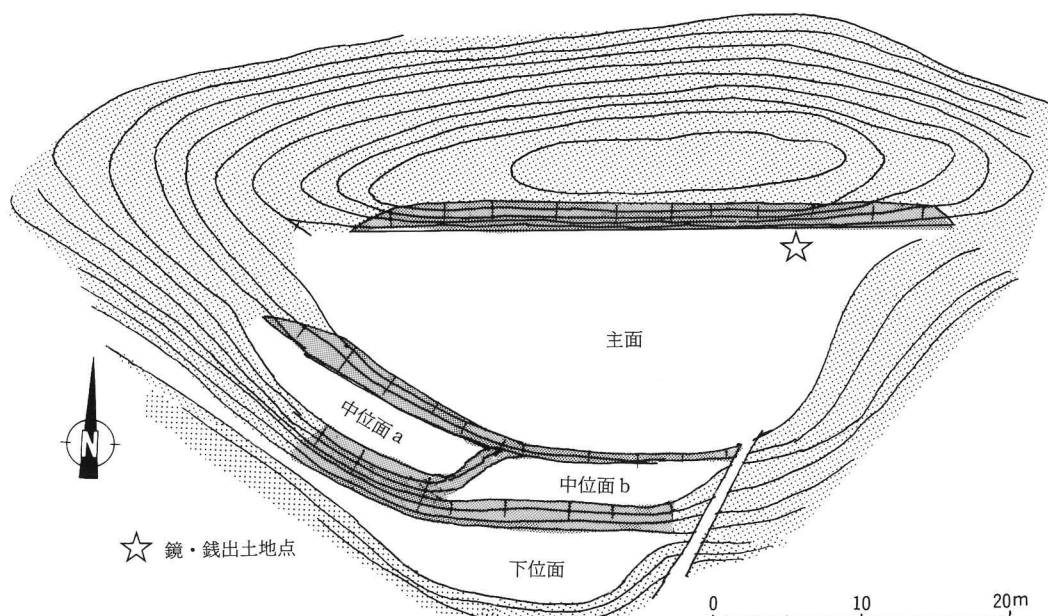
愛宕神社は母牟礼城跡の東にある（第39図6）。その祭神は軻遇突智神、すなわち愛宕の神で、大永元年（1521）佐伯惟治が勧請している。こうした戦・火防の神である軻遇突智神を祭神とする愛宕神社・釈魔神社は周辺地区にも多いことが目を引く。列拠すると、佐伯市では古市・上岡・久部・大船繫、弥生町では釈魔山・植松に祀られている、これらの愛宕神社は、修験道・密教の本社・霊場の一つである京都府愛宕山に由来する。

佐伯氏が建立した神社としては、今熊神社・祖母嶽明神祠が母牟礼城跡の東・南東麓にある。今熊神社は京都の今熊野社の分霊を佐伯惟治が大永年間（1521～1527）に勧請している。祖母嶽明神は、大神系一族の出自にまつわる祖母山（姫母嶽）を祭ったもので、多くの大神系諸氏にとって重要な神である（第39図13）。

山上寺跡と関係のある神社としては、大蔵八幡社がある。本来的には「応神天皇」等を祭神としていたのでは



第39図 山下寺周辺の遺跡分布図



第40図 山上寺跡境内模式図

ろうが、現在は今熊神社に合祀されている。しかし社地には、「春江陽公座元・大永六夫八月」という銘の入った春好の墓石がある。この神社は山上寺からみて西北の谷にあり、一帯は門前と呼ばれている。

これまで梶牟礼城跡の山塊と山上寺跡のある山塊に挟まれた谷に立地する神社を見てきた。こうした地区と、脇地区には寺院跡も点在している。これらの寺は、伝承などから江戸時代に存在した形跡はなく、中世にさかのぼることが予想される。脇の集落内にある二寺、三寺は、北側背後の山頂部にあった二上寺・山(三)上寺の僧の里坊があった為にそう呼ばれている。

脇地区には上記の寺院の他、星の宮神社(第39図23)があった(現在は鶴望板山に所在)。社伝には「延暦3年(784)6月、一夜天明に、星光爛として地を射るあり、仍て祠を建て之を祀る。桓武天皇の御宇、延暦年間、脇村の前字一丁畑といへる地に、1個の星隕たり。(佐伯古社神明記)」とある。神体に隕石を祀っていることから考えて、星辰信仰を重要視する陰陽道・密教からの影響が考えられる。

山上寺や梶牟礼城跡からみて南方向の番匠川を渡った場所に龍護寺がある。創建は社伝によると、正治年間(1199-1200)に山本源太有明が主君緒方三郎惟栄の菩提を弔うための草庵を作ったのに起源する。以来、佐伯氏の菩提寺となった真言宗の寺である。

山上寺は管見の限り、中世文書には登場しない。しかし、一般的にいて佐伯地方を佐伯惟定が去って以来武士団が解体・帰農したこともあってか、中世文書はほとんど伝世していない。山上寺が文書に登場するのは、文政12年巳丑(1829)に書写の記載がある「梶牟礼実録」である。この文書は野史ともいわれ学界では重視されていない。しかし、地名・史実・年代等で実在する場合も多く、江戸時代になお伝存していた中世文書や詳しい伝承をもとに書かれたのだろう。

さて山上寺に関する梶牟礼実録の記述は次のとおりである。「ここに山上寺の住僧春好と云う行徳、外法を兼備し…。」「春好申しけるは、『昔、梶尾の妙慧上人を次郎と号す。…』」、「…ある時、板の節穴より壇上の次第を透見しけるに、本尊はその色赤きこと燃える火のごとし。形体は手足数多ありて百足のごとし。」「虚無僧褊袈の形と合掌数拜して行を見れば、威綱の三郎、不二の太郎の術を修す。」とある。これらの事柄について佐伯市史では真言密教の荼吉尼天修法としているが、疑問点もあり再考証の必要がある。むしろ梶牟礼実録の記載をそのまま理解すれば、千手観音〜金翅鳥王である飯縄示現大明神を祀る密教系修験道の呪法と考えられる。

これまで山上寺や周囲をとりまく宗教遺跡を概観してきた。その結果、中世にかぎれば鎌倉新仏教よりも、密教・修験道・陰陽道などの強い影響を受けた神社・寺院であることがこのあたりの特色と言えよう。(綿 貫)

3 遺構と遺物

(1) 遺構の状況 (第40図)

寺院の中心部と考えられる主面は、背後の尾根部分の南側を比高差約3mでいど切り落して形成されており、面積約20m²、東西最大長約40m²の規模を有する。主面の東北部で、切り落とし直下に鏡・銭出土地点がある。主面の南には中位面が取り付く。中位面は、中位面aと中位面bに区分できる。このうち中位面aは約13.5m²の広さを有し、主面からの比高差は約2m弱である。中位面bは約10m²の広さを有し、中位面aからの比高差は約15mである。中位面の南には約3m～4mの比高差をもって下面が取りつく。下面の面積は約21m²である。これまでみてきた中位面と下位面の東端には、山麓から延びる古道が接しており、上方の主面に達する。なお、下位面の西北方向は緩やかにすばまり、回廊状の道となり、主面背後から続く尾根に至る。

全体的に観察すると、各面は尾根頂部の南側斜面に高度を減じながら展開している。ようするに尾根の北側ではなく、南側を意識した造作といえよう。この「山上寺」跡は、その立地と江戸時代に作成された「拇牟礼実録」の記載からすれば密教を修した寺と考えられるので、当然密教系の寺に通有な「金堂・護摩堂」といった主要な建物の位置が問題となる。この点を踏まえ、「山上寺」跡の各面ふり返ってみると、最も広い面積を有する主面に主要堂塔の位置を推定するのが自然であろう。

(綿 貫)

(2) 鏡

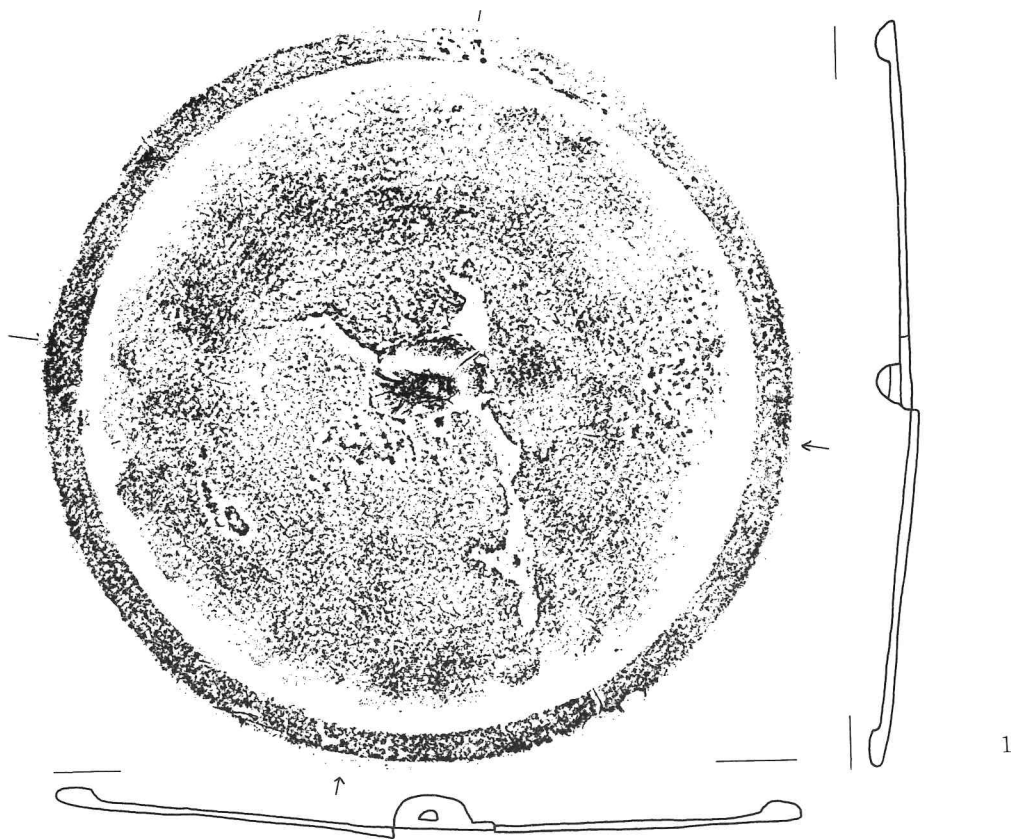
湖州素文円鏡 (第41図1) 平面形や背面観は、径が11.09cmの円形で、幅約6mmの縁帯がめぐり、中央部には長楕円形鈕が位置する。鈕と縁の間には、表面を回転調整した際のものと考えられる微細な線条痕が同心円状にめぐっている。鏡の断面形や側面観は、約2.5mm～3mmの厚さをもつ半円形・隅丸台形の縁と、紐状の銅を折りまげたような鈕である。鏡の背面には古紙の皮膜や繊維が観察される。重量は66g。

湖州六花鏡① (第41図2) 平面形や背面観は、最大径が10.4cm、花卉間と対向する花卉間の径は9.9cmの六花形である。また幅5mm～6mmの縁帯がめぐり、中央に長方形の鈕が位置する。鏡の背面には磨った痕跡があり、為に紀名号区画がわずかに残る。側面形は、約1.5mm～2mmの厚さをもつ台形縁と、板状の銅を折りまげたような鈕に特徴がある。背面と縁は磨られてその比高差がほとんどなくなっている。鏡に観察される付着物には、古紙の皮膜と繊維がみられた。重量は72g。

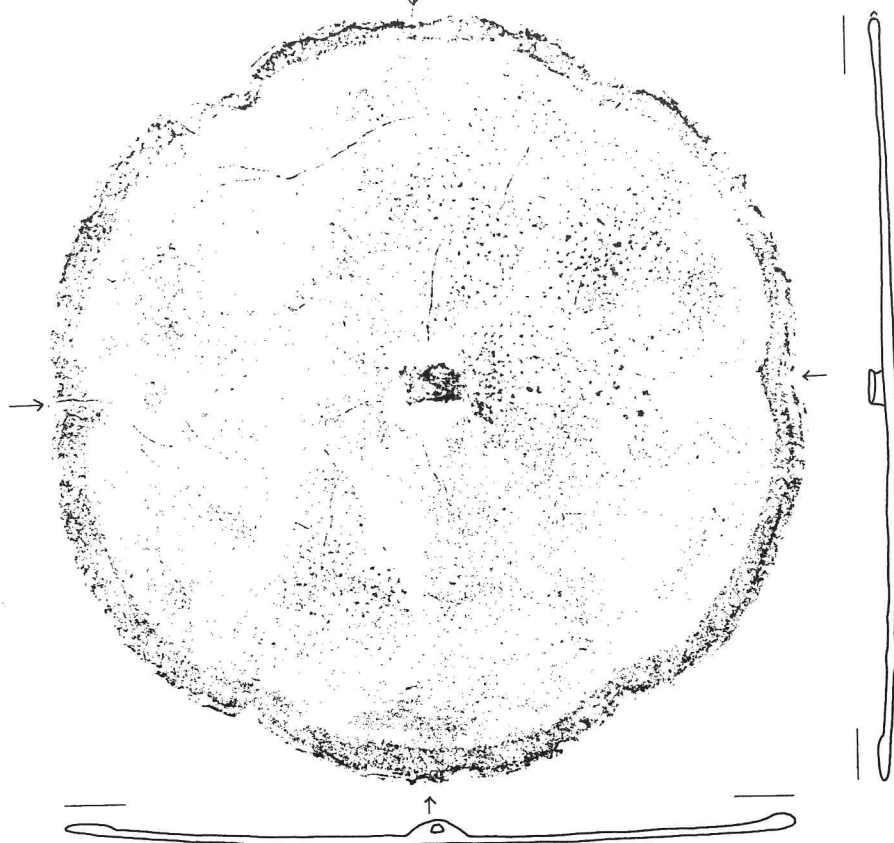
湖州六花鏡② (第42図3) 平面形や背面観は、最大径が10.3cm、花卉間と対向する花卉間の径は9.5cmの六花形である。また幅7mmの縁がめぐり、中央部に鈕が長方形であったことを示す痕跡が残っている。右半分の中程には不明瞭ながら銘号区画が観察され、「□州真石念二、□□□」とある。鏡縁の厚さが2.0mm～2.5mmの台形縁である。鏡脂の厚さは0.9mm～1.2mmで、鏡の重量は79g。鈕の痕跡からみると、板状の銅片を折りまげたような鈕であったと推定される。付着物は、古紙状の皮膜と繊維が観察される。重量は79g。

菖蒲双雀双蝶文鏡 (第42図4) 平面形や背面観は、径9.85cmの円形を示し、内部は径7.4cmの圏線をめぐらして外区と内区に区分している。外区には斜行する細線が施されるが、内区には絵画的構図となっている。内区には鈕を境として両側に菖蒲を配する。菖蒲に挟まれるように、鈕の上位で花の近くには2羽の蝶が飛かい、鈕の下位で根元近くには2羽の雀が戯れる様となっている。鈕座は花形座系と見られるが、磨滅が著しく不明瞭である。側面形や断面形については、細縁外傾式で鏡面は水平である。縁は細縁外傾式のなかでも、内湾ぎみに立ち上がる点に特徴があり、鏡面側からの高さは5.5mm、縁の幅は1.5mm。鏡胎の厚さは0.8mm～1.1mmで、界圏は単圏細線である。鈕は低い鈕座の上にゆるやかな山形で乗る。鏡に観察される付着物は、古紙状の皮膜がわずかにみられ、中に繊維が混入する。また、茶褐色の土も若干見られ、マンガン状の黒色粒が観察される。重量は48g。

竹垣菖蒲双雀鏡 (第43図5) 平面形や背面観は、径が8.65cmの円形で、内部は径6.1cmの圏線をめぐらして外区と内区に区分する。外区の上・下半部には、細線がそれぞれ左右に二分される形で配される。内区は鈕の下に竹垣が画かれ、その向うに菖蒲が鈕を挟んで立ち上がる。更に鈕の上方には菖蒲の間を飛びかう二羽の雀が描か

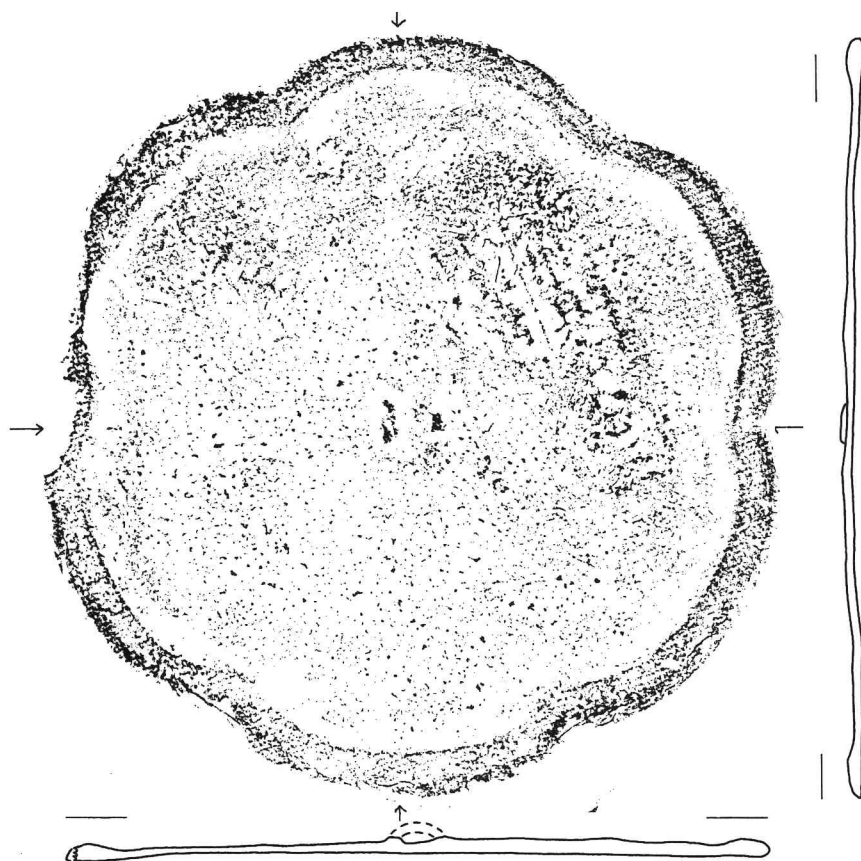


1

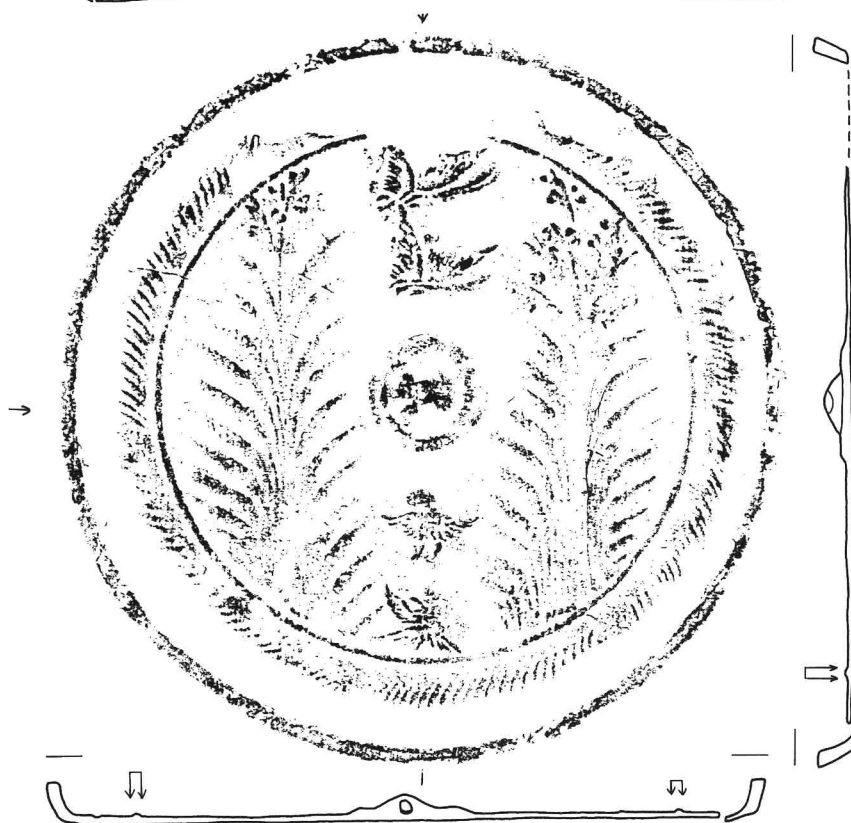


2

第41図 山上寺跡出土銅鏡拓影図と断面図 (その1)

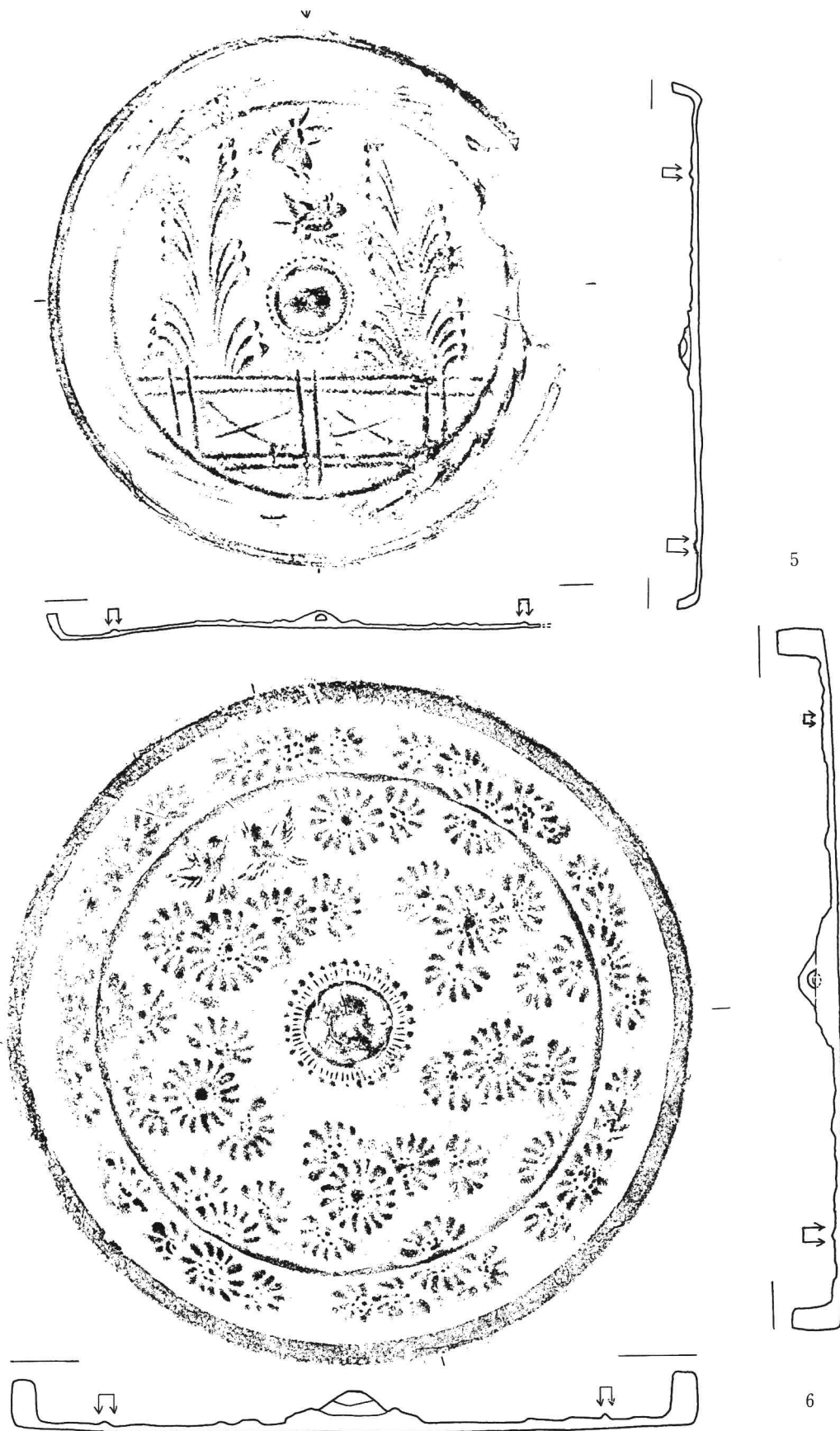


3



4

第42図 山上寺跡出土銅鏡拓影図と断面図 (その2)

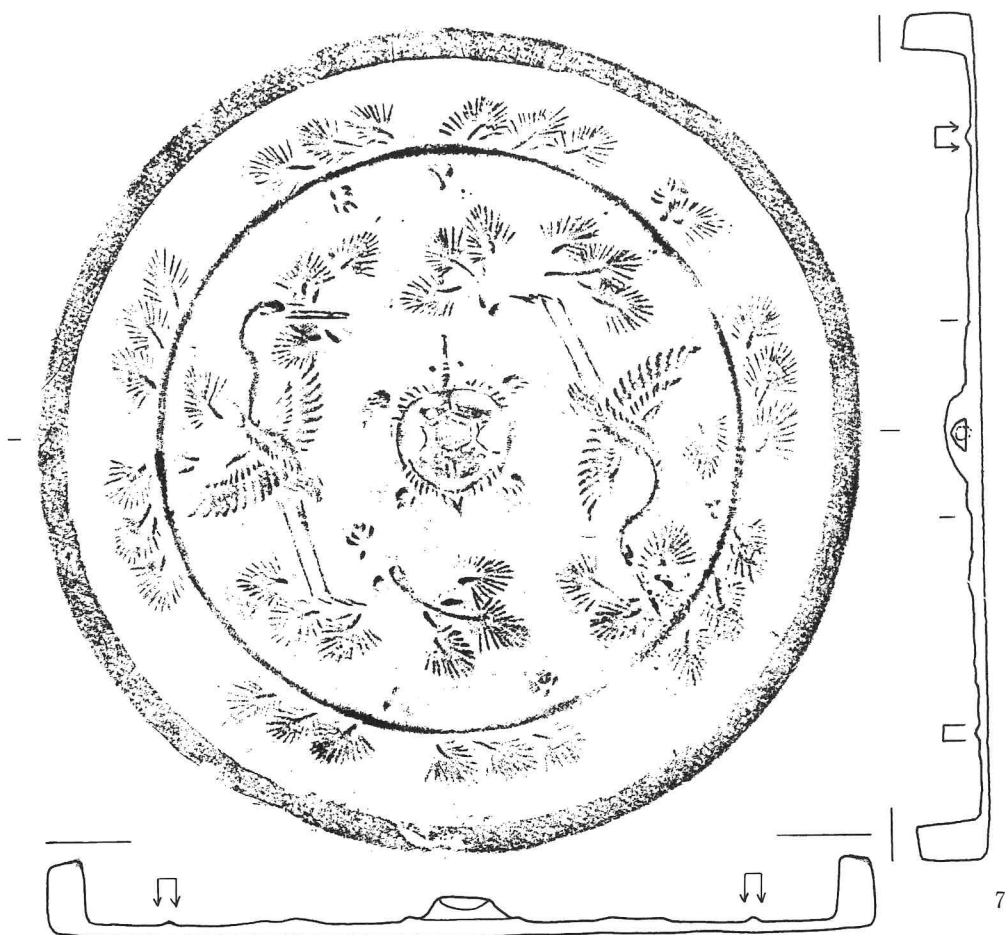


第43図 山上寺跡出土銅鏡拓影図と断面図 (その3)

れている。鈕の下位には花蕊文と考えられる鈕座がある。側面観や断面形については、細縁外傾式で鏡面は水平である。縁は、内湾ぎみに立ち上がる点に特徴があり、鏡面側からの高さは3.5mm、縁の幅は1.5mm、鏡胎の厚さは0.9mm～1.3mm。界圈は単圈細線である。鈕は載頭円で、ゆるやかな山形の鈕孔を有する。なお鈕は低い鈕座の上に乗る。彫刻文様の断面形は、界圈と竹垣は半円形であるが、その他は緩斜形となっている。なお鏡に観察される付着物は古紙状の皮まく（暗緑色）が顕著で、中に繊維が見られる。その他、茶褐色の土が付着し、マンガン状の粒子が若干観察された。重量は38g。

菊花双雀文鏡（第43図6） 平面形や背面観は、径11.25cmの円形で、内部は径8.25cmの界圈をめぐるし内外区に分ける。菊花は内外区にまたがって散らされる。花同士が切合によって見える部分と、見えない部分の表現がなされている。なお鈕のやや左上方の内区内に、斜めに相対して飛翔する二羽の雀が表現されている。鈕座は花蕊文で修飾する。側面観や断面形は厚縁直角式で鏡面はほぼ水平である。縁上端部幅が2.5mm、縁下部幅は4.5mmとなり、やや中ぶくれ状となっている。鏡胎の厚さは1mm～2mm。鈕孔の形は長半円形である。また鈕孔内部の中央が低い位置である。界圈や菊花は半肉彫風である。鈕の断面形は、載頭円である。付着物は、古紙の皮膜・繊維の他、微細なマンガン風の粒を含む「土」が観察される。重量は201g。

松喰鶴鏡（第44図7） 平面形や背面観は、径が11.2cmの円形で、内部は7.9cmの界圈をめぐるして外区と内区に区分する。内外区ともに松枝を散らす。内区には鈕・鈕座が亀形座鈕となっている。亀の顔部を上方に向けたとき、左右に鶴を配する隔鈕反対布置交互馳貨式をとる。側面観や断面形は、厚縁直角式で鏡面を水平とする。縁は外面がやや内傾する。つまり縁上端部は下方に向かって斜行する。界圈の断面はゆるい尖状式。鈕孔の形は長半円形である。鶴本体は丸い彫りで、羽部と足先部は緩斜な彫法である。口先部、脚部と松葉は針状の細かい幅狭な断面である。縁上端部の幅3.7mm、縁下部の幅5.2mm、縁の高さ1cm、鏡胎の厚さ1.5mm～1.8mm等が鏡の厚さである。付着物は、古紙の皮膜・繊維とマンガンを含む茶色の土が観察される。鏡の重さは241g。（綿貫）



第44図 山上寺跡出土銅鏡拓影図と断面図（その4）

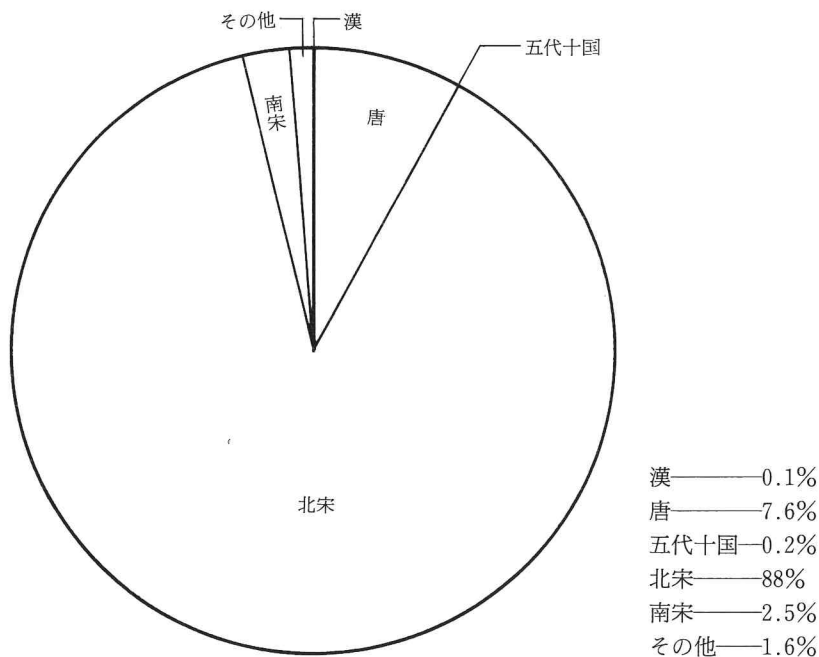
●出土銭貨

本出土銭貨の総数は797枚で、内判読可能銭数は784枚、判読不能銭数は13枚であり、判読可能銭の全てが中国銭であった。銭種は四銖半兩（漢 前0175初鑄）から嘉定通寶（南宋 1208初鑄）までの39種類であり、これら判読可能銭を国別・銭種別に分類し一覧表を作成した（第4表）。さらにこの一覧表をもとに鑄造国別比較図（第45図）・銭種別比較図（第46図）を作成した。

また、資料の保存状態はあまりよいとはいえ判読不能の銭貨は全て強い破損を受けており中には細かい破片に分かれているものもあった。また当時の作業員の証言によると銭貨はばらばらの状態で容器に詰められていたようであり、サシなどを使って整理された状態ではなかったようだ。

各銭貨の特徴（第47図～第51図）

- 1 は半兩銭で四銖半兩と呼ばれるものであり、数量は1枚のみである。
- 2 は唐で鑄造された開元通寶で総数は59枚は、全て真書体である。小分類は出来ないが裏面に刻字のあるもののみを別にした。※潭の刻字のあるもののみ初鑄年が会昌5年（西暦845）である。
- 3 は乾元重寶で総数2枚、全て真書体で小分類不能である。
- 4 は漢元通寶で1枚のみ、真書体で背文があり上弦であると思われる。
- 5 は唐国通寶で総数1枚、篆書体である。
- 6 は宋元通寶で総数5枚、全て真書体で小分類不能である。
- 7 は太平通寶で総数7枚、全て真書体で小分類不能である。
- 8 は淳化元寶で総数5枚、全て真書体である。小分類数は3で、その特徴は、I a（2枚）は刻字が楷書体である事。I b（2枚）は刻字が草書体であり、化の第四画が下にはねている事。I c（1枚）は刻字が草書体であり、元の第三画にハネがある事である。
- 9 は至道元寶で総数16枚、全て真書体である。小分類数は3でその特徴は、I a（4枚）は刻字が楷書体である事。I b（6枚）は刻字が草書体である事。I c（6枚）は刻字が行書体である事である。（小分類不能数6枚）。
- 10 は咸平元寶で総数10枚、全て真書体で小分類不能である。
- 11 は祥符元寶で総数20枚、全て真書体で小分類不能である。
- 12 は祥符通寶で総数7枚、全て真書体である。小分類数は2でその特徴は、I a（4枚）が刻字が大きい（符



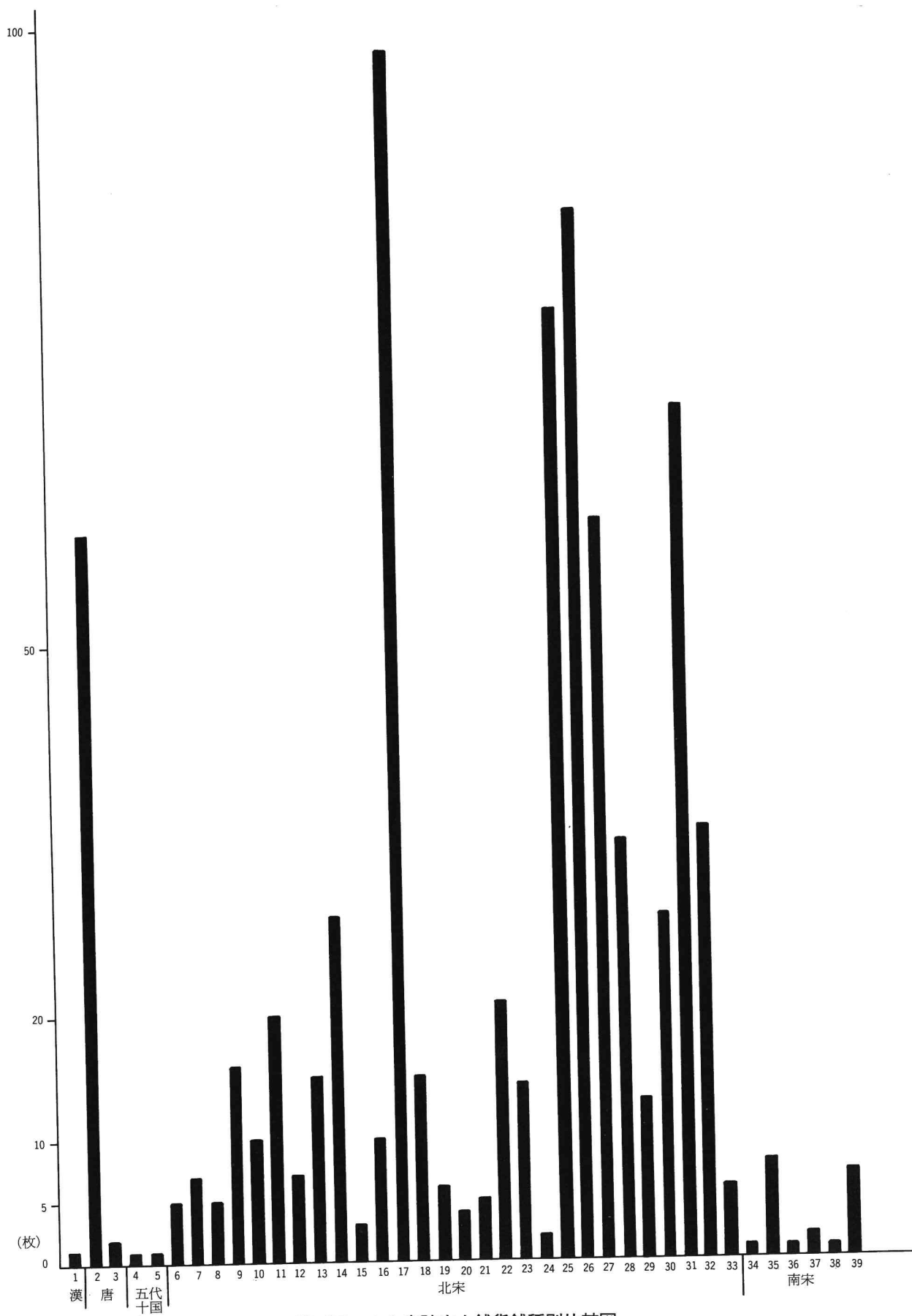
第45図 山上寺跡出土銭貨鑄造国別比較図

(3) 銭 貨

第4表 山上寺跡出土銭貨一覧

No.	国名	名 称	初 鑄 年 (西 曆)	枚 数	分 類 数	備 考
1	漢	四銖半兩	文帝 5 年 (前175)	1	1	
2	唐	開元通寶	武德 4 年 (0621)	5 9	1	背文銭を含む (2 2 枚)
3	唐	乾元重寶	乾元 2 年 (0759)	2	1	
4	後漢	漢元通寶	乾祐元年 (0948)	1	1	背文銭である
5	南唐	唐国通寶	交泰元年 (0985)	1	1	
6	北宋	宋元通寶	建隆元年 (0960)	5	1	
7	北宋	太平通寶	太平興國元年 (0976)	7	1	
8	北宋	淳化元寶	淳化元年 (0990)	5	3	星形孔銭を含む (1 枚)
9	北宋	至道元寶	至道元年 (0995)	1 6	3	
10	北宋	咸平通寶	咸平元年 (0998)	1 0	1	
11	北宋	祥符元寶	大中祥符元年 (1008)	2 0	1	
12	北宋	祥符通寶	大中祥符元年 (1008)	7	2	
13	北宋	天禧通寶	天禧元年 (1017)	1 5	1	
14	北宋	天聖元寶	天聖元年 (1023)	2 8	2	
15	北宋	明道元寶	明道元年 (1032)	3	1	
16	北宋	景祐元寶	景祐元年 (1034)	1 0	2	
17	北宋	皇宋通寶	寶元 2 年 (1039)	9 8	5	星形孔銭を含む (2 枚)
18	北宋	景德元寶	景德元年 (1044)	1 5	1	
19	北宋	至和元寶	至和元年 (1054)	6	2	
20	北宋	至和通寶	至和元年 (1054)	4	2	
21	北宋	嘉祐元寶	嘉祐元年 (1056)	5	2	星形孔銭を含む (1 枚)
22	北宋	嘉祐通寶	嘉祐元年 (1056)	2 1	2	
23	北宋	治平元寶	治平元年 (1064)	1 4	2	星形孔銭を含む (1 枚)
24	北宋	治平通寶	治平元年 (1064)	2	1	
25	北宋	熙寧元寶	熙寧元年 (1068)	7 7	4	星形孔銭を含む (1 枚)
26	北宋	元豐通寶	元豐元年 (1078)	8 5	2	星形孔銭を含む (5 枚)
27	北宋	元祐通寶	元祐元年 (1086)	6 0	2	
28	北宋	紹聖元寶	紹聖元年 (1094)	3 4	2	星形孔銭を含む (3 枚)
29	北宋	元符通寶	元符元年 (1098)	1 3	2	
30	北宋	聖宋元寶	建中靖國元年 (1101)	2 8	4	星形孔銭を含む (1 枚)
31	北宋	大觀通寶	大觀元年 (1107)	6 9	1	
32	北宋	政和通寶	政和元年 (1111)	3 5	3	
33	北宋	宣和通寶	宣和元年 (1119)	6	2	星形孔銭を含む (1 枚)
34	南宋	建炎通寶	建炎元年 (1127)	1	1	星形孔銭である
35	南宋	淳熙元寶	淳熙元年 (1174)	8	1	全て背文銭である
36	南宋	紹熙元寶	紹熙元年 (1190)	1	1	背文銭である
37	南宋	慶元通寶	慶元元年 (1195)	2	1	背文銭である
38	南宋	開禧通寶	開禧元年 (1201)	1	1	
39	南宋	嘉定通寶	嘉定元年 (1208)	7	1	背文銭を含む (6 枚)

(註) 本表の作成にあたり、銭貨の初鑄年の設定は次の文献から引用した。
 孫仲容著「簡明錢幣辭典」上海古籍出版社
 劉巨成著「中国古錢譜」文物出版社
 無錫丁福保原著「歷代古錢図説」陝西旅遊出版社



第46図 山上寺跡出土銭貨銭種別比較図

の横幅が5mm以上)事。I b (3枚)は刻字が小さい(符の横幅が5mm未満)事である。

13は天禧通寶で総数15枚、全て真書体で小分類不能である。

14は天聖元寶で総数28枚、真書体のもの(18枚)と篆書体のもの(10枚)とがあったが小分類不能である。

15は明道元寶で総数3枚、全て真書体で、小分類不能である。

16は景佑元寶で総数10枚、真書体のもの(6枚)と篆書体のもの(4枚)とがあったが、小分類不能である。

17は皇宋通寶で総数98枚、真書体のものと篆書体のものとがありそれぞれ小分類をおこなった、その特徴は以下の通りである。I a (22枚)は刻字が大きい(皇の横幅が7mm以上)事、I b (23枚)は刻字が小さい(皇の横幅が7mm未満)事。II a (28枚)は刻字が大きい(宋の横幅が7mm以上)事と、宋のかんむりと寶のつくり(宋=𠄎 寶=寔)がある事。II b (10枚)は刻字が大きい(宋の横幅7mm以上)事と、宋のかんむりと寶のつくり(宋=𠄎 寶=寔)がある事。II c (14枚)は刻字が小さい(宋の横幅が7mm未満)事と寶のつくり(寶=寔)がある事である。

18は景德通寶で総数15枚、全て真書体で小分類不能である。

19は至和元寶で総数6枚、真書体のもの(4枚)と篆書体のもの(2枚)とがあったが、小分類不能である。

20は至和通寶で総数4枚、真書体のもの(1枚)と篆書体のもの(3枚)とがあったが、小分類不能である。

21は嘉佑元寶で総数5枚、真書体のもの(1枚)と篆書体のもの(4枚)とがあったが、小分類不能である。

22は嘉佑通寶で総数21枚、真書体のもの(12枚)と篆書体のもの(9枚)とがあったが、小分類不能である。

23は治平元寶で総数14枚、真書体のもの(8枚)と篆書体のもの(6枚)とがあったが、小分類不能である。

24は治平通寶で総数2枚、全て真書体で小分類不能である。

25は熙寧元寶で総数77枚、真書体のもの(46枚)と篆書体のもの(31枚)とがあり、篆書体のもののみが小分類可能であった、その特徴は以下のとおりである。II a (14枚)は刻字が大きい(熙の縦幅が8mm以上)事。II b (16枚)は刻字が小さい(熙の縦幅が7mm未満)事。II c (1枚)はII a・II bとは全く違った形状の刻字である事である。

26は元豊通寶で総数85枚、真書体のもの(44枚)と篆書体のもの(41枚)とがあったが、小分類不能である。

27は元佑通寶で総数60枚、真書体のもの(26枚)と篆書体のもの(34枚)とがあったが、小分類不能である。

28は紹聖元寶で総数34枚、真書体のもの(15枚)と篆書体のもの(19枚)とがあったが、小分類不能である。

29は元符通寶で総数13枚、真書体のもの(3枚)と篆書体のもの(10枚)とがあったが、小分類不能である。

30は聖宋元寶で総数28枚、真書体のもの(14枚)と篆書体のもの(14枚)とがあり、どちらも小分類不能であった、その特徴は以下の通りである。I a (8枚)は刻字が大きい(宋の横幅が7mm以上)事。I b (6枚)は刻字が大きい(宋の横幅が7mm未満)事。II a (4枚)は刻字に差異がある(宋=𠄎)事。II b (10枚)に差異がある(宋=𠄎)事である。

31は大観通寶で総数69枚、真書体のもののみで小分類不能であった。

32は政和通寶で総数35枚、真書体のもの(16枚)と篆書体(19枚)とがあり、篆書体のもののみが小分類が可能であった。その特徴は、II a (6枚)とII b (13枚)では和の刻字に差異(II a-U字形 II b-円形)がある事である。

33は宣和通寶で総数6枚、真書体のもの(3枚)と篆書体(3枚)とがあるが小分類不能である。

34は建炎通寶で1枚のみ、真書体のものである。

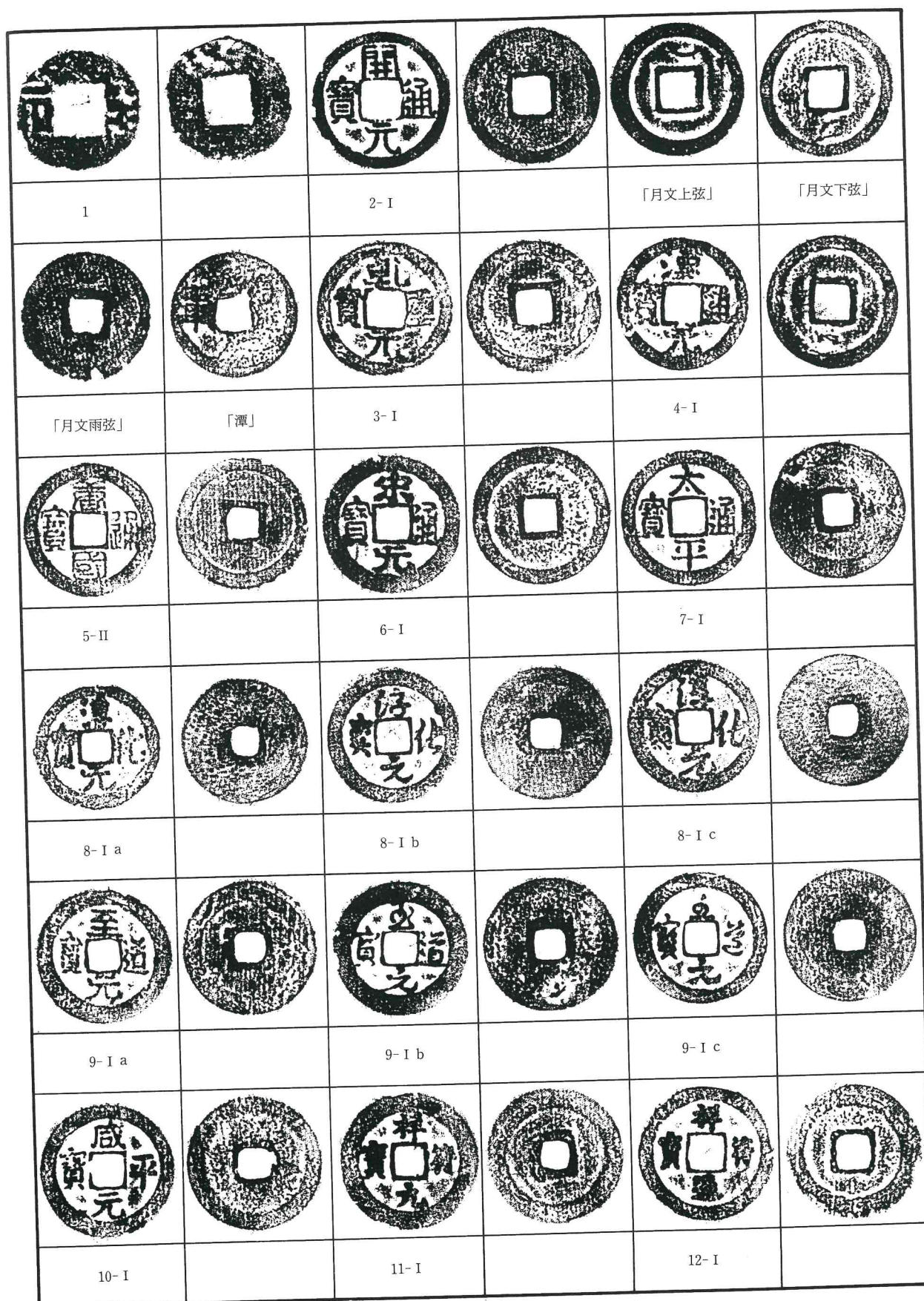
35は淳熙元寶で総数8枚、全て真書体で全てに背文があり、小分類不能である。

36は紹熙元寶で総数1枚、真書体で背文がある。

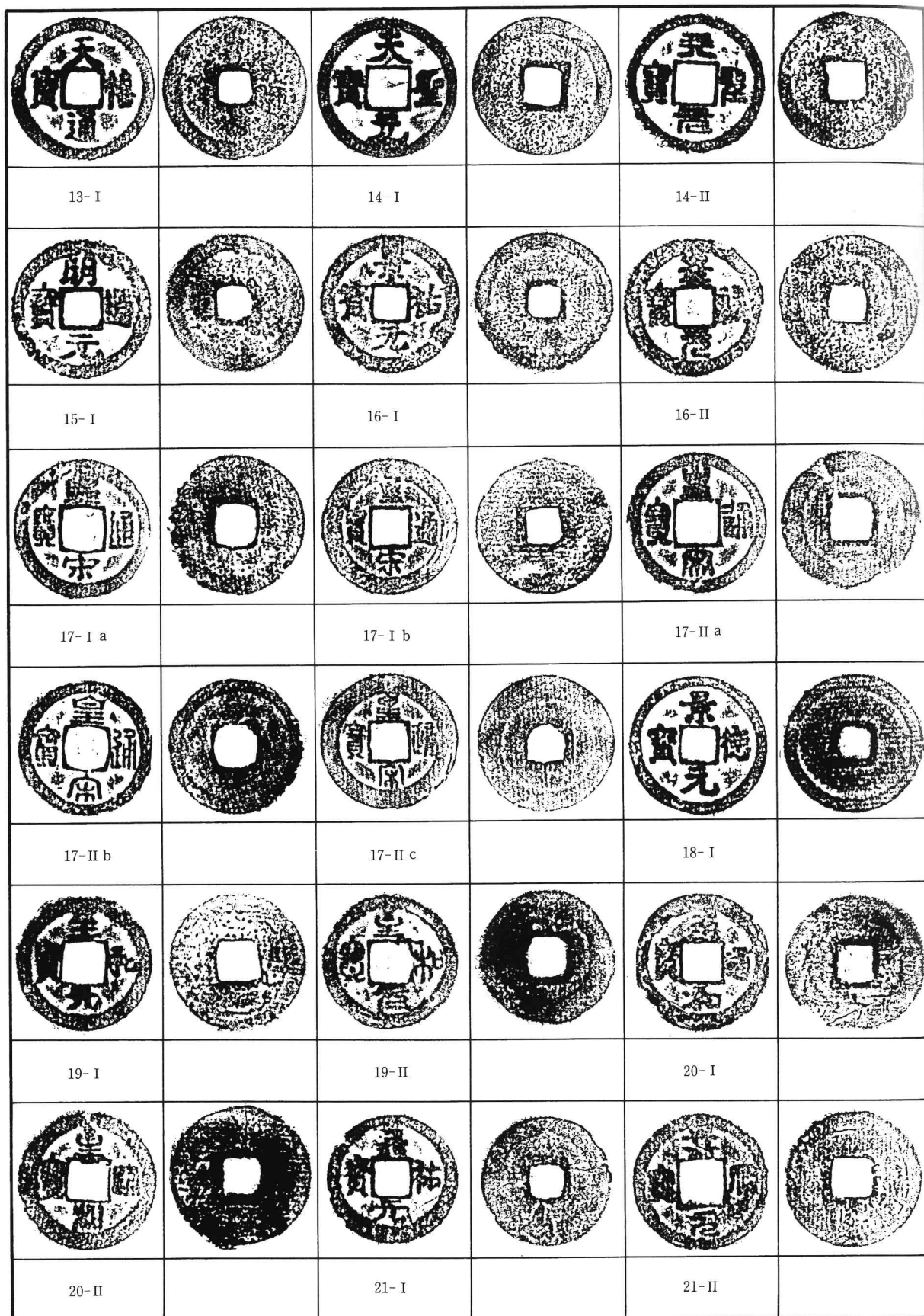
37は慶元通寶で総数2枚、全て真書体で背文があり、小分類不能である。

38は開禧通寶で総数1枚、真書体である。

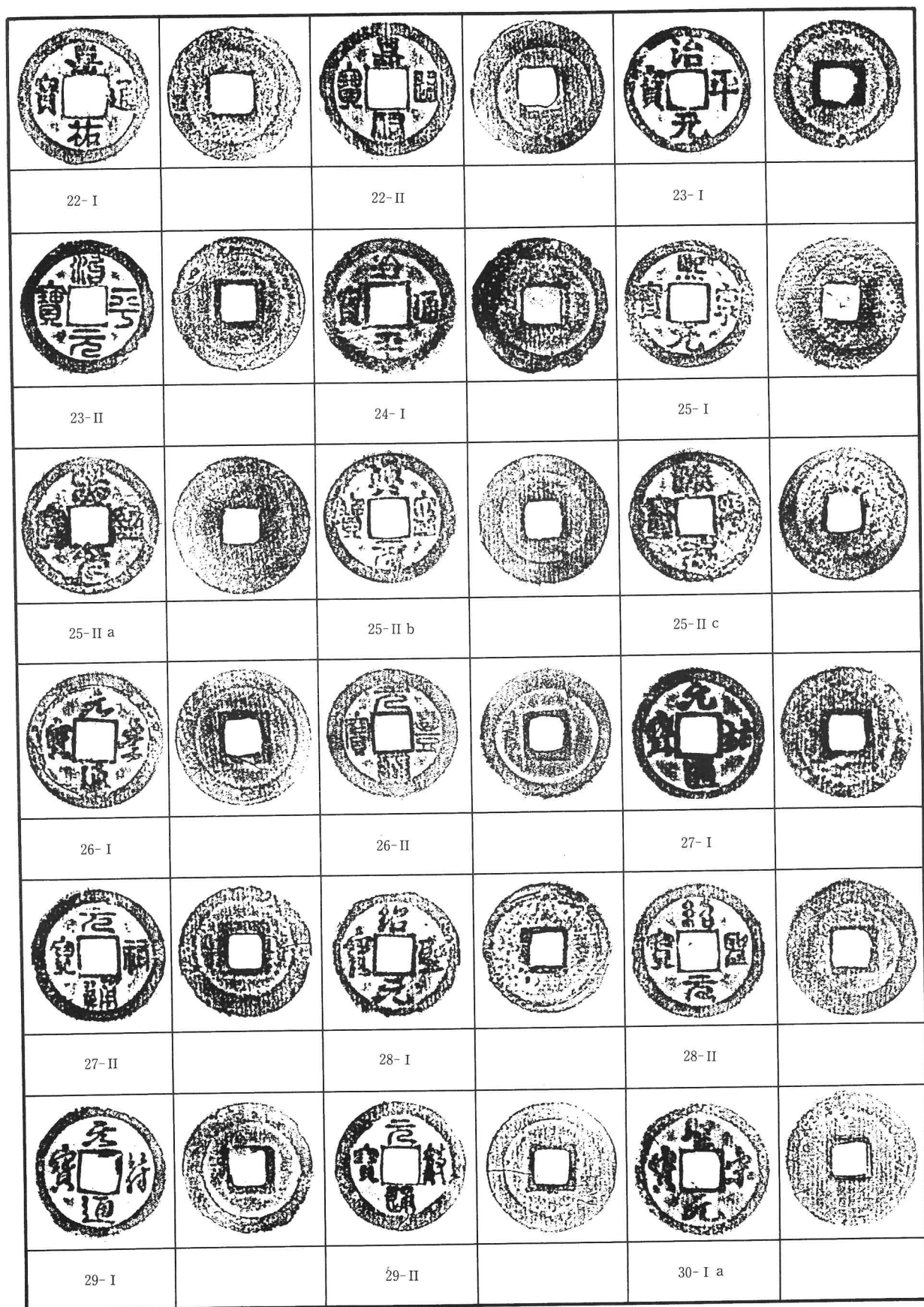
39は嘉定通寶で総数7枚、全て真書体で内6枚に背文があり、小分類不能である。



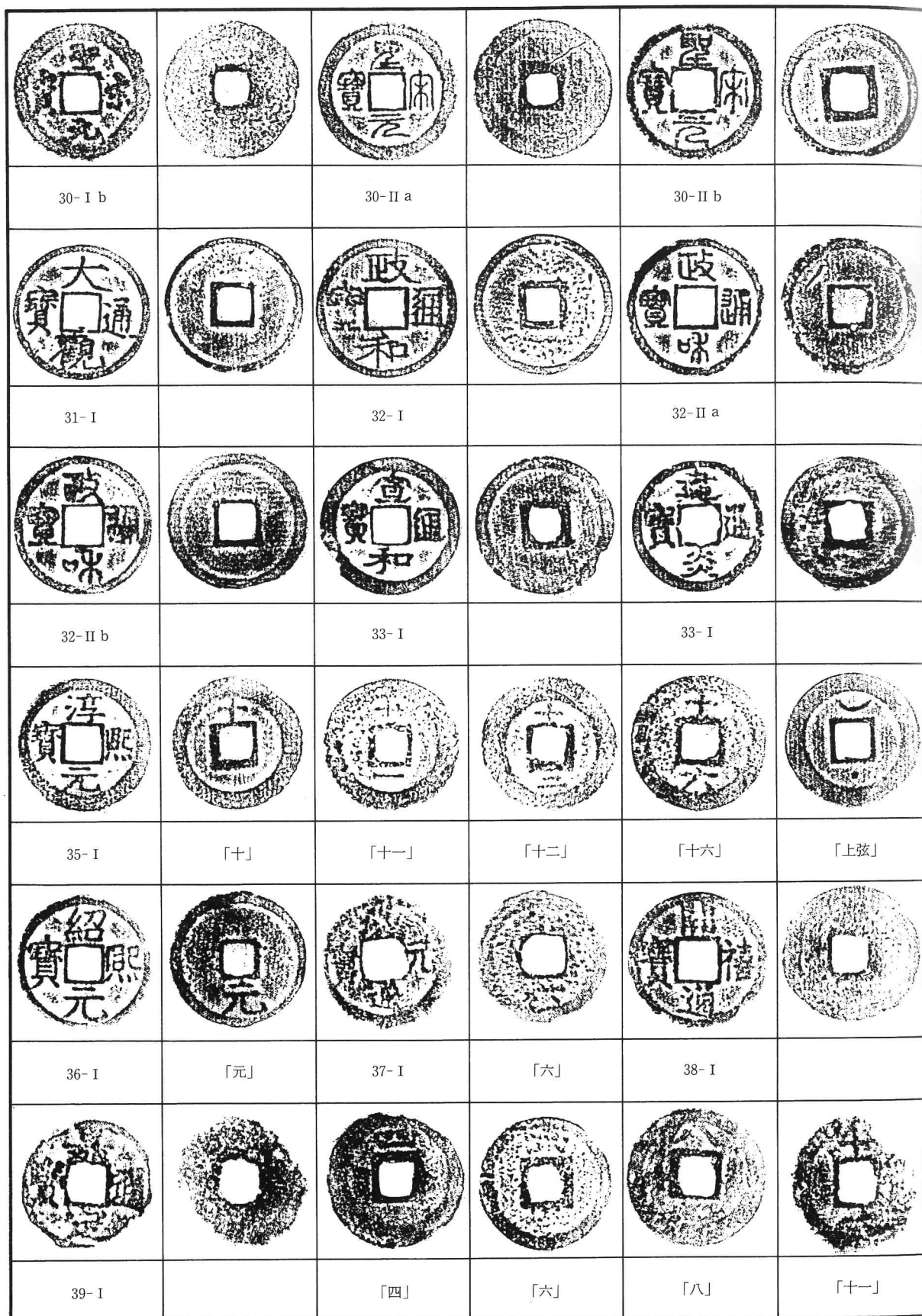
第47図 山上寺跡出土銭貨拓影 (1)



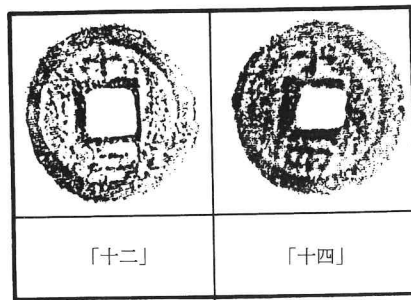
第48圖 山上寺跡出土錢貨拓影(2)



第49図 山上寺跡出土銭貨拓影 (3)



第50図 山上寺跡出土銭貨拓影 (4)



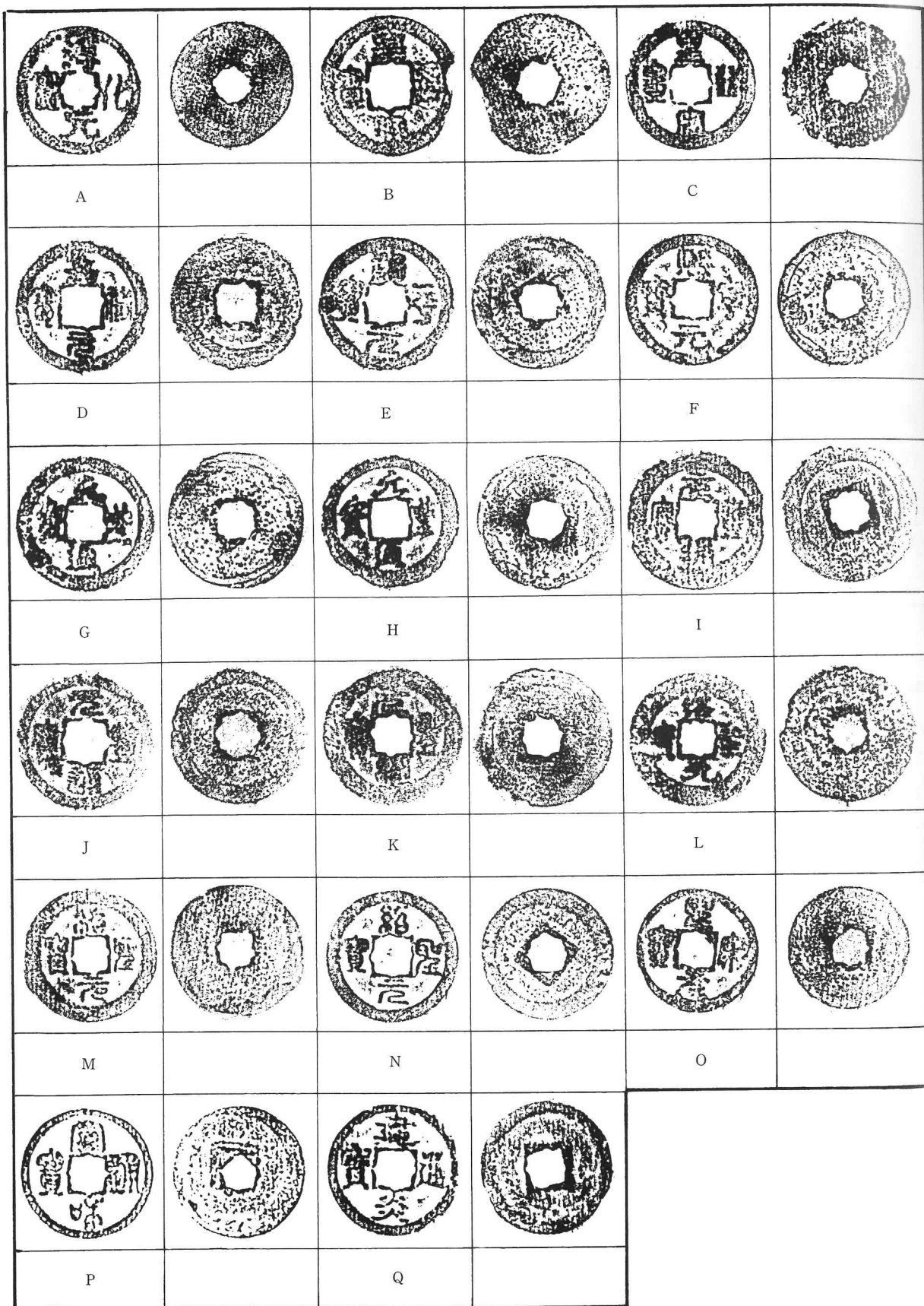
第51図 山上寺跡出土銭貨拓影(5)

第5表 山上寺跡出土銭貨背文一覧

銭 名	背 文 種 (数字は枚数)
開元通寶	「月文上弦」13、「月文下弦」5、「月文両弦」1、「潭」1。
漢元通寶	「月文下弦」1。
淳熙元寶	「十」1、「十一」1、「十二」2、「十六」2、「月文上弦」2。
紹熙元寶	「元」1。
慶元通寶	「六」2。
嘉定通寶	「四」1、「六」1、「八」1、「十一」1、「十二」1、「十二」1。

特殊な銭貨(第12図)

今回調査の銭貨の中に16枚の星形孔銭がある。星形孔銭とは、銭貨の中心孔に四辺とも一ヵ所ずつ切り込みがあり、孔形が星のように見えるものを指す。この星形孔銭は新安沈没船の銭貨や中国本土出土の銭貨内でも確認され報告がなされており⁽¹⁾、鑄造時もしくは鑄造国内流通中において切り込みを入れたものであると考えられている。これらがどういった目的で加工されたのかについて、はっきりと判明はしていないが、その加工の方法からみても特殊な意味付けがなされていたのは明らかである、鑄造国を含めた今後の研究に期待したい。(後 藤)



第52図 山上寺跡出土星形孔銭拓影

4 ま と め

1) 鏡

ここでは研究史的背景をもとに山上寺跡出土の鏡を位置づけてみる。

湖州鏡は、残された文献等から考えて、その創業年代は西暦1100年前後、衰退年代は西暦1197年頃とされている(王1991)。このことを裏づけるように創業年代をさかのぼる例は中国や日本でもない(第3表)。一方、1197年の「銅器私鑄の再禁止(呉興誌)」以後も湖州鏡は市場に出回っていたものや、使用されていたものもあったようで、中国の南宋末、日本の南北朝時代初頭(新田神社例、1337年)に至るまで用いられている。いずれにしても湖州鏡の最盛期は中国・日本ともに12世紀代から13世紀前半代と言える。したがって山上寺跡出土の湖州鏡は、12世紀代を中心に14世紀にかかる間とまず考えておきたい。

以上をふまえて和鏡を位置づければ、次のようになる。山上寺跡出土の湖州鏡・和鏡の埋納は13世紀前半と考えられる。その根拠としては、12世紀代に盛行した細縁式と13世紀以後急速に増加する厚縁式鏡が組み合っているからである。

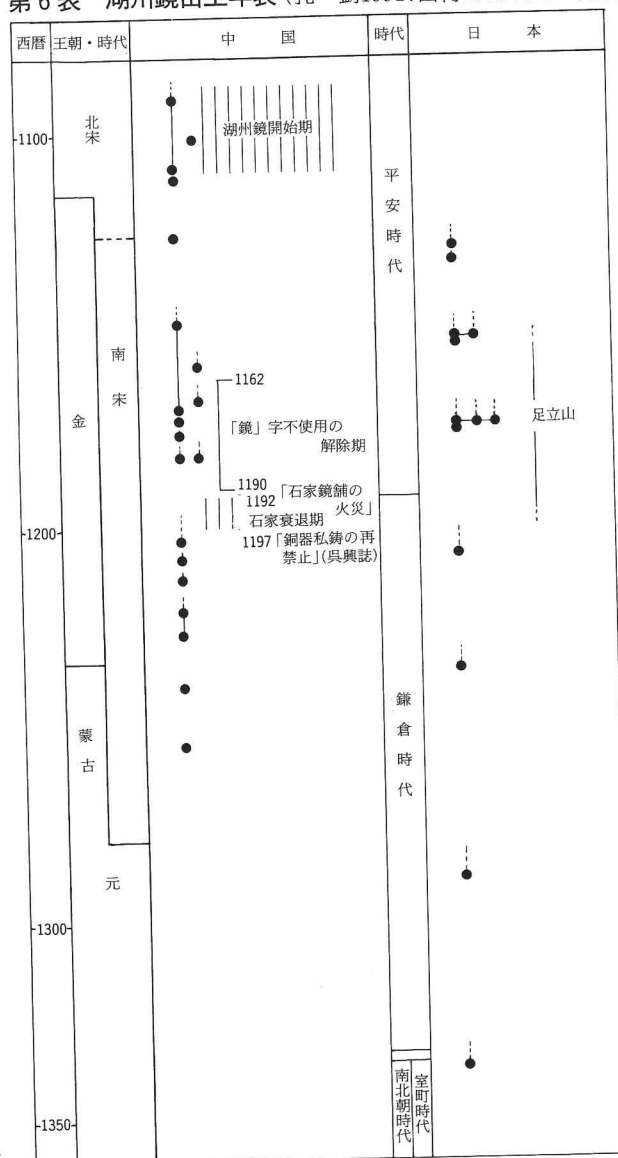
具体的に山上寺跡の厚縁式菊花双雀文鏡を観察すると次のような特徴をもつ。

1. 菊花に切合いがあること。
2. 二羽の雀の体が相対せずに隣接し、鈕の斜め上方に位置する。
3. 文様の高低がはっきりすること。
4. 縁が直角式の厚縁であること等の特徴がある。

以上、列記した事柄の中には16世紀代に下るものもあるが、おおむね13世紀代の特徴でもある。しかも13世紀代とされる和泉市久保惣記念美術館所蔵の羽黒山御手洗池中縁菊花双鳥文鏡(金工102)、京都府与謝郡府中村籠神社境内経塚の文治五年(1189)銘経塚伴出の籬菊蝶鳥鏡(厚縁)・菊飛雀鏡(厚縁)などに類似する要素がある。したがって、山上寺の菊花双雀文鏡は12世紀末～13世紀前半に製作されたと考えても無理がない。

次に松喰鶴鏡から見た年代上の位置を考えてみたい。まず松喰鶴鏡は、松を喰はない鶴を描く松鶴鏡、芦双鶴鏡、網結松双鶴鏡等も構図の類似から見て久保氏の言うように同一鏡式といえよう(久保1986)。この鏡式の特徴は、双鶴が鈕を中心に旋回し、その間に松等の植物を配する。これらの松喰鶴鏡は、広瀬都巽氏の和鏡年表では(広瀬1974)、保安三年(1122)～天治元年(1124)銘を有する茨城県東城寺経塚を最初に、建久七年(1196)銘を有する埼玉県利仁神社経塚の間に収まる。この後、松喰鶴鏡は観察されない。しかし、13世紀代に入ると、広瀬氏の年表や筆者の表(第4表)に示すとおり経塚や紀年の判る鏡は急激に減少するが、広瀬氏の年表においては1206年～1255年の間が空

第6表 湖州鏡出土年表(孔・劉1991.西村1983を元に作成)



白となっている。筆者は結論として、空白の約50年間を中心とした時期に山上寺跡出土の「松喰鶴鏡」を位置付けた。その根拠は、鈕が室町時代に盛行する亀であっても、広瀬氏の年表で資料が増加する1255年以降も松喰鶴鏡が全く見られないことが第1の理由である。第2の理由は、12世紀後半に属する松喰鶴鏡の全てが細縁の鏡縁で彫りの浅い文様に特徴があることから、厚縁の鏡縁で彫りの深い文様の山上寺例を同一時期に位置付けることはできない。そうかと言って、型式学上の連続性を考慮すると同一の鏡式である両者を離れた段階に位置付けることもできない。

一般的に12世紀代の細縁式鏡に観察される文様の鋳出は浅く線状の隆起によって表現されるのに対し、13世紀代に盛行する中縁・厚縁鏡の場合は主要文様がレリーフ風に表現される。更に文様に関して付け加えれば、鈕を中心に上半・下半・左半・右半のうち、対極する場所に配置される鶴は、細縁鏡の場合は画面の約3分の2の規模であるが、中縁・厚縁鏡の場合は約3分1に縮小する傾向がある。

そこで厚縁の鏡縁で彫りの深い文様が発達・増加しはじめ13世紀前半期と山上寺例を位置付けるのが順当であろう。尚、山上寺例に亀鈕が見られることは、11世紀代の鏡にも観察されることから不自然ではないことを付け加えておきたい。こうしたことを裏づける事例として、12世紀を中心に盛行する細縁式松鶴鏡と13世紀を中心に盛行する厚縁式松鶴鏡が共存する福井県深山寺2号経塚例がある。

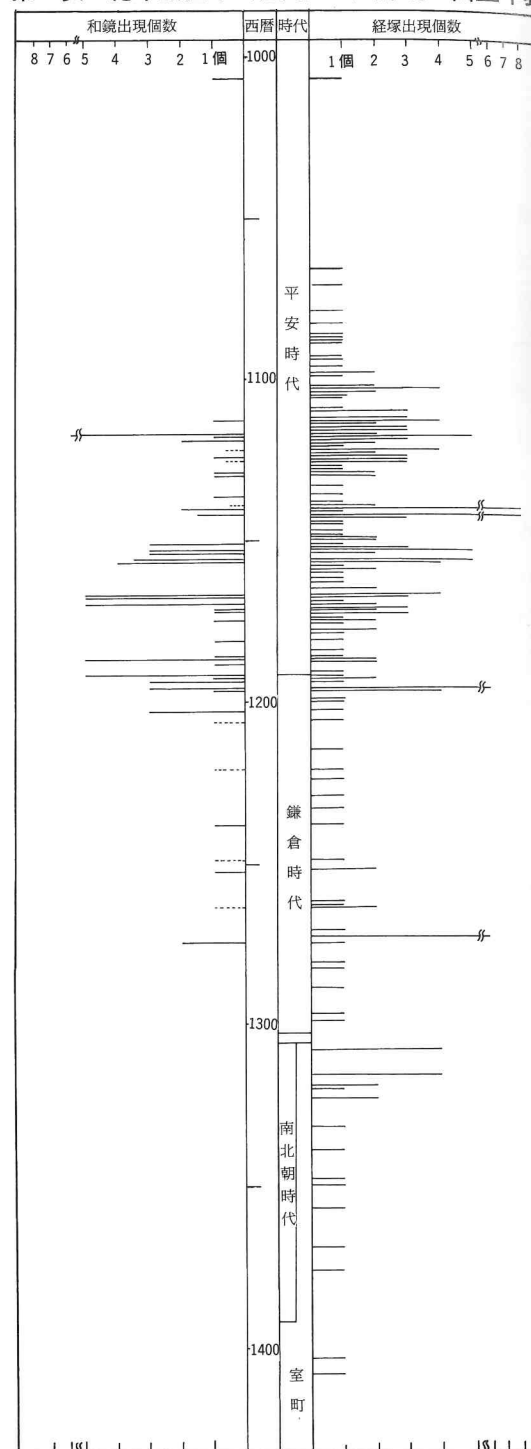
以上が、山上寺出土鏡の埋納期を13世紀前半とする根拠である。(綿 貫)

2) 出土銭貨の埋蔵時期

本出土銭貨が埋蔵された時期は、最新銭が嘉定通寶(1208年初鑄)であることから西暦1208年以降であることは間違いない、また大量一括出土銭貨の時期区分については、備蓄銭研究の分野でもっとも盛んであり、鈴木公雄氏によって備蓄銭内の最新銭初鑄年代により上限年代を設定する時期区分がなされ、それに対応するおおよその年代が与えられている⁽²⁾。

鈴木氏による時代区分を紹介すると、南宋の皇宋元寶(1253年初鑄)ないし咸淳元寶(1266年初鑄)が最新銭のものを一期として最古の備蓄銭とし、元の至大通寶(1310年初鑄)が最新銭のものを二期とする。以下同様の考え方で、三期は明の洪武通寶(1368年初鑄)をもつもの、四期は同じく永樂通寶(1408年初鑄)を最新銭とするもの、五期は李氏朝鮮の朝鮮通寶(1423年初鑄)をもつもの、六期は明の宣徳通寶(1433年初鑄)をもつもの、七期は琉球王朝の世高通寶(1461年初鑄)・大世通寶(1457年初鑄)ないしは15世紀中頃までに鑄造された安南王朝銭貨(大和通寶、延寧通寶など)のいずれかを最新銭とするもの、八期は明の弘治通寶(1488年初鑄)、同じく嘉靖通寶(1522年初鑄)、さらに15世紀後半に鑄造された安南王朝銭貨(洪順通寶、光順通寶、洪徳通寶、景統通

第7表 紀年銘経塚(経筒)と共伴鏡の出土年表



※関(1979)を元に加筆して作成した。

寶など)や琉球王朝の金門世寶(1470年初鑄)といった錢貨のいずれかをともなうもので、これを備蓄錢の最末期としている。

これによると本出土錢貨は、第一期にあたり、13世紀後半の第四四半期を中心とした時期が対応する年代として設定されている。ただし最新錢の初鑄年が、鈴木氏の基準とする皇宋元寶や咸淳元寶よりも約50年ほど古いこと、13世紀初鑄の錢貨が開禧通寶(1201年初鑄)と嘉定通寶(1208年初鑄)の2種しかないことなどを考慮すると埋蔵時期は13世紀代に限定して考えるのが妥当であろう。(後 藤)

3) 山上寺跡出土品の埋納時期のまとめ

これまで、鏡と錢貨の埋納時期に言及してきた。その結果、錢貨では13世紀代、鏡では13世紀前半とそれぞれの埋納年代が推定された。そこで山上寺跡出土の一括遺物(鏡・錢貨)の埋納年代を、松喰鶴鏡の流行時期等から考えて13世紀前半と考えておきたい。(綿 貫)

4) 山上寺跡埋納品の性格

日本の鏡は、古くより中国歴代王朝期の鏡が流入し、和鏡の成立に際してその影響を強く受けている。そしてその用途は主に墳墓への副葬・池へ投入・経塚への埋納・神社や寺院への奉納・経塚以外の埋納など、宗教的行為の中で用いられている。このような鏡をめぐる発見状況のなかにあつて、山上寺跡出土の遺物も埋納されていた。しかも発見者からの御教示によれば器の中に入っていたとされる。こうした出土状況からみると、上述したうちの墳墓・経塚への埋納・墳墓や経塚以外の埋納のうちいずれかとなる。

こうした3つの可能性のうち、山上寺跡出土品を墳墓や経塚に由来すると考えた場合、鏡(墳墓の場合)と錢貨(経塚の場合)の量が多すぎるという問題がある⁽³⁾。以上のことを踏まえて墳墓や経塚以外の埋納品の類例を観察し、山上寺跡出土品の性格を探ってみたい。

広島県帝釈雄橋野呂第2号洞窟ではおおむね南北に並んだ2基の石囲炉状遺構から出土する(河瀬1978)。北側の石囲いの中と周囲からは、鉄鍋、鉄鎌、鉄包丁、貨幣約12枚、鉄製円盤(鏡?)が出土し、南側石囲いの中からは、方形の箱に入れていたかのように和鏡2枚、貨幣約120枚、鉄小枝が出土していた。16世紀終末の和鏡と慶長通宝の存在からみて、1596年以降17世紀初頭の遺構・遺物といえる。

大分県深水邸遺跡では、土坑内のうち備前焼大甕の内外から出土した(村上・吉田・今泉1989)。甕内からは、貨幣58枚、舌口式鉄刀、和鏡、鉄鉞、鉄鎌、白磁片が置かれ、この上に鉄輪(五徳)とこれに掛けた状態で鉄鍋が見つかった。鍋の中には土師質小皿58枚が入っていた。甕の上には石蓋を置き、更に土鍋がふせた状態で置かれていた。甕外からは、小皿9枚、鉄斧、錢貨、弓の痕跡が見つかった。報告書は出土遺物から14世紀代の年代を与え、名主層かそれ以上の層の資材と理解されている。更にその性格として「特殊な性格」を考えている。

この他、大分県由布嶽山麓遺跡では江戸末期に位置付けられる埋納物がある。ここでは羽釜の中に数千枚の貨幣が入っていた⁽⁴⁾。

これまで見てきた3遺跡は、鏡が伴出する・しないはともかく、貨幣が経塚出土の場合と異なって異状に多いことが注意される。したがってそれらは経塚とは別の意味を内包した遺構・遺物と考えるのが自然であろう。こうした遺物の用途を考えると思い起こされるのが、いざなぎ流陰陽道である。いざなぎ流陰陽道では「呪詛」と呼ばれる人間や家の罪穢れや不浄、悪霊邪神などの障りを残らず幣に取り集め、本来の清らかな状態に戻すのである。更に呪詛のついた幣は専用の捨場や、川、河原の岩陰で五印鎮めの印を結んで埋めたり、流したりしている。この際、湯をはった鍋に貨幣・米を入れ、魔を祓い吉凶を知る米占の場面がある。また、陰陽道の呪術で善悪を判断する盟神探湯の際にも鍋が用いられていたことは有名である。この他、近世・近代の葬制に「鍋被り人骨」がある。この場合は癪病など異常死した人間の不浄を封じ込める意味を鍋は持っていたのである。

一方、鏡は神・仏の御正体として用いられた他、諸願成就・病氣平癒の願を結び入れて神社・仏閣に奉納されたり、御洗池などの湖沼に投下されている。この他深水邸の場合では鏡が、斧・鎌・鉞・刀・土師器・弓(痕跡)

とともに埋納された状況で見ついているが、これらについても修験道採燈護摩における、護摩木製作・法弓作法・法剣作法・斧作法・闍伽作法の際に同様な器具が用いられている。

このようにみると、広島県や大分県の事例が墓でないとするれば、陰陽道、密教、修験道の呪術・修法に関わる法具と考えるのが自然であろう。またその法具組成の違いは、呪術・修法の「行われた時期」や「内容」によっても異なっていたのであろう。いずれにしても、人々の「諸願成就」・「祈願」・「占い」の際に用いられたり、「障り」を封じ込める際に用いられた法具を、埋めることによって、それを鎮めたのであろう。祭事に一度使用した器物を一括廃棄や使用停止するという行為は、宇佐神宮弥勒寺などでも行われていた。例えば弥勒寺の土坑内から、質や法量が同様な土師質土器がほとんど割れない状況で見ついていることから判る。ともあれ、前記した広島県・大分県の遺跡付近には、帝釈峽、八面山、由布・鶴見嶽といった霊場が控えていることも、埋納品の背景を考えるとときに示唆するところが大きい。

以上のような背景の中で山上寺跡出土の鏡と貨幣はどのように考えられるだろうか。たしかなことは判断できないが、現状では修験道・密教・陰陽道の修法・呪術に際して用いられ、埋めることによって鎮めたものと考えたい。その理由としては前述したように、それら多量の遺物が一括して丁寧に埋納されていたこと⁽⁵⁾と、その量が経塚の場合をはるかに超えていたからである。加えて貨幣を備蓄銭とするにはその量が少なく、鏡が確実に共伴するという問題があり、更に、鏡6面・貨幣約800枚という量と、「本堂・護摩堂」等の主要堂宇があったと推定される造作面の隅から出土していることからみて墓と考えにくい面があったのである。

以上、はなはだ簡単ではあるが山上寺出土物の性格を考えてみた。今後の課題としては次のことがある。まず、50年以上も前に鏡や銭が見つかったとき、それらは「器のようなものに入っていたきがする。」と発見者の一人広瀬キンさんの言う「器」がどのようなものであったのか、破片を探索する必要がある。合せて山上寺跡の発掘調査を行い、山嶽寺院の実態を今すこし詳らかにする必要がある。それらの結果によっては、埋納された鏡・銭の性格や背景がよりはっきりしてこよう。今後の調査に期待したい。(綿 貫)

注

- (1) 櫻木 (1992)
- (2) 鈴木 (1992)
- (3) 管見によれば、経塚から出土する銭貨で最も多いのは長野県秋宮経塚(室町時代)からの139枚である(関1988)。経塚からの銭貨の枚数は、通常20枚以内である。
- (4) 村上久和氏の御教示。
- (5) 鏡表面の付着物から、和紙につつまれていたことが推定される。

参考文献

- 王士倫(入倉徳裕訳)1991「中国湖州銅鏡」『古代学研究』124, 古代学研究会刊, 京都, P21-26
河瀬正利1978「6 帝釈峽遺跡群の分布調査」『広島大学文学部帝釈峽遺跡群発掘調査室年報』I, 広島大学帝釈峽遺跡群発掘調査室刊, 広島, P.34-39
久保智康1986『古鏡の美』福井県立博物館刊
櫻木晋一1991「九州地域における中・近世の銭貨流通—出土備蓄銭・六道銭からの考察—」『九州文化史研究所紀要』36, 九州文化史研究所(九州大学)刊, 福岡, P87-122
櫻木晋一1992「北九州八幡西区本城出土の備蓄銭」『古文化談叢』27, 九州古文化研究会刊, 北九州
鈴木公雄1988「出土六道銭の組合せからみた江戸時代前期の銅銭流通」『社会経済史学』48-4, 東京
鈴木公雄1989「出土六道銭の枚数と墓の保存状態」『考古学の世界』新人物往来社刊, 東京
鈴木公雄1992「出土備蓄銭と中世後期の銭貨流通」『史学』61-3・4, 東京
関秀夫1979「経塚遺物の紀年銘集成」『東京国立博物館紀要』第15号, 東京国立博物館刊, 東京, P21-248
関秀夫1988『経塚—関東とその周辺』東京国立博物館刊 東京
永峯光一・春木豊・川崎義雄・内川隆1992「伊豆諸島出土・伝世和鏡基礎集」『国学院大学考古学資料館紀要』第8輯, 国学院大学考古学資料館刊, 東京, P134-190
広瀬都巽1974『和鏡の研究』角川書店刊, 東京
前田洋子1984「羽黒鏡と羽黒山頂遺跡」『考古学雑誌』第70巻第1号, 日本考古学会刊, 東京, P76-129
前田洋子・福原敏男1985『日本の古鏡—女装美のプロデューサー—』大阪市立博物館刊, 大阪
村上久和・吉田寛・今泉正子1989「三光村の遺跡」『三光村文化財調査報告書』第1集, 大分県三光村教育委員会刊, 大分
著者不明1829『樞牟礼実録』

補

- 孔祥星・劉一曼(高倉洋彰・田崎博之・渡辺芳郎訳)1991『図説中国古代銅鏡史』中国書店刊, 福岡
西村強三1983「鹿児島県下に傳わる中国宋元時代の鏡」『九州歴史資料館研究論集』9, 九州歴史資料館刊, 福岡, P43-103



山上寺跡出土の鏡



菖蒲双雀双蝶文鏡・竹垣菖双蝶文鏡



上段 菊花散双雀文金・下段 松喰鶴鏡